# 年 譜

一八六九年六月二七日　現在ソヴェト連邦の一つであるリスアニアソヴェト社会主義共和国のコスナ Kausna 古くはコブノ Kovno に、ユダヤ人を父母として生れた。母トベ・ビエノウイッチは医師の娘で、ラベ・ツオドコフに嫁し、二児レナとヘレナを生んだが、夫の死後、コブノの住人アブラハム・ゴールドマンと再婚、その第一子としてエマが生まれた。この後ヘルマン、モリスと二名の男児が生まれたがゴールドマン氏は第一子が男児でなかったのを不満とした。ロシア領土内のユダヤ人に対する迫害とゴールドマン氏自身の投機の失敗によって家計は苦しくなり、親類を頼って生活しなければならなくなる。従ってエマ自身の幼児期は楽しいものではなく、只、近所の若い農夫ペトルシカによってフルートを教わり、また彼女はロシア人特有の美声をもっていたと言われている。教育はドイツ系ユダヤ人教師について、主としてドイツ語により、ローマン派の文学を学んだ。

一八八一年冬　エマの家族はペテルスブルグの雑貨店にその頃勤めていた父と共に生活するため、始めてロシア領内に入る。

このペテルスブルグ時代に彼女はゴンチャロフ、チエルニシエフスキーの小説に親しむ。一五才の時、父アブラハムは結婚させようとしたが彼女は父権に敢然と反抗する。「わたしは勉強をつづけさせて欲しいと頼んで抗議しました。ところが父はフランス文法書を火にくべて云うのです。『女の子が沢山勉強する必要はない。ユダヤ娘の知るべきことは魚の味付けとめん類の切り方、それに男に沢山な子供を与えることだ』わたしは勉強したり、人生を知り、旅行したかったのです。それに愛以外のもので結婚したくありませんから頑固に自説をまげませんでした」。こうして父娘の闘争は継続された。父は生活の失敗を娘の結婚によって幾らかでも回復しようと、鞭や体罰で強いたが、娘はこれに対し優しさや微笑でやわらげようとしないで強烈だった。ただいつも間に入ってくれたのはヘレナであった。

一八八五年　ペテルスブルグの下町のコルセット工場で働いていたエマにヘレナは米国への移民の費用を払い、先に行っているレナに合流しょうと申出る。

一八八五年十月　エマとヘレナはハンブルグへ向いエルベ号で米国へ渡る。ロチエスター在のレナの家に滞在した二人はヘレナが写真のネガの修正の



仕事をみつけ、エマは一日一〇時間アルスター（長外套）を縫い週給で二ドル五〇セントを得る。彼女は米国の工場はロシアに比べ灯が明るく設備はよいが女子工員同志の会話や歌は禁じられていて、いわば能率のための訓練が厳しいのを知る。また工場の経営はドイツ系ユダヤ人で、ここでロシア系ユダヤ人が歓迎されるのは安い労働力を提供するからだと解った。

一八八七年二月　エマはロシア系ユダヤ人ヤコブ・ケルソナとユダヤ式に結婚。この結婚は彼女がロシヤ語しか話せないで、淋しかった時に共にロシヤ語を読みダンスができる相手として、ヤコブ青年が面前に現われたことによる。

この頃娘達を追って米国へ移住したゴールドマン夫妻はエマの結婚を喜んだ。しかしヤコブは不能者で、医師の治療を受けたが回復しなかった。彼はカードに溺れ、エマにとって生活は急迫した。彼女はケルソナを置いてニューヘブンのコルセット工場で働くようになり、ここで昼間働き、夜は社会主義やアナーキズムを論じるグループと接触した。しかしホームシックにかかり再びローチエスタへ戻った。ケルソナは後を追ってきたが争った後、彼と別れ彼女はヘレナと一緒に生活を始めた。父母はエマの離婚に反対。父アブラハムはエマが〝ルーズな性格で家族の名を恥ずかしめるもの〟だと非難したが、彼女は自分がこれまで娼婦にもなら

ずすごせたのは父である貴方のためではなく、ヘレナのお蔭だと云い、こうした対話によってかえって二〇年に亘る父娘の感情のシコリが解けた。しかし、ロチエスターのユダヤ人社会でのエマの評判はラジカルで悪い、解放された女というよくないものだった。

一八八九年八月一五日　エマは自覚したラジカルとしてニューヨークへ向った。この地で彼女はアレキサンダー・ベルクマンと知合い、またヨハン・モストのヘイマーケット事件についての弾劾演説を聞く。以来モストは彼女の師とアイドルになる。モストは彼女を音楽、文学、演劇の世界へ導き、特に演説の才能を彼女にみつけだす。以来、モストに従って米国各地を遊説。また、クロポトキンの著作に親しむようになる。クロポトキンは彼女にロシアの伝統によって話しかけるので容易に受入れやすかったものと理解される。

一八九〇年　アナーキスト会議において実行委員会の委員に選任されたが、委員会の発行した〝ドイツの中央集権化〟の論文が気に入らず会を離脱。この頃よりベルクマンと親密になる。なおアレキサンダー・ベルクマンは一八九二年六月二三日ピッツバーグクロニクル電報局内でカーネギー製鋼所、ホームステッド社の支配人ヘンリー・クレイ・フリックを襲撃する。理由は独禁法でさえ阻止できない企業の巨大化に伴う、労働争議の激化とそれにつづく弾圧に抗し、敏腕を謳われたフリックを資本家側



の悪の体現者と認めたのであった。しかしフリックは助かりベルクマンは二二年の刑に処せられる。ドイツ系、ユダヤ系アナーキストはこの事件に関し、ベルクマンを非難する。従って最初から彼と行動を共にしたエマは弁護に務め、モストと別れる。

一八九三年　恐慌が米国を訪れ、各地でストライキが続発、彼女は病弱を押して各地で演説。資本主義の矛盾を衝く。フイラデルフイアの会場で逮捕される。罪状は彼女の演説が暴動を誘発し、非合法の集会を開催したということである。地方副判事マッキンタイルとの応答はこの頃の彼女の心情を語るものとし興味深い。

質　ゴールドマン嬢、あなたは神を信じますか。

答　いいえ、信じません。

質　この地上であなたの認める法律を有する政府はありますか。

答　いいえ。全部民衆には敵対しています。

質　それではあなたの好まない法律のあるこの国をどうして出て行かないのですか。

答　何処へ行けばよろしいでしょうか？地上の何処でも法律は貧しい者に敵対しています。だから人がわたしは天国へ行けないと言います。わたしだってそこへ行きたくありません。

彼女はブラックウエル島の刑務所で一年の刑を受ける。ここで病人を看

護し同囚の世話をする。

一八九四年八月　同刑務所を出獄する。米国の進歩派、自由主義者アンブロスビアス、ジェムズ・ハンカー、サダキチ・ハルトマン、ジョン・スイントン、等のサークルに呼ばれる。これらの人々との交遊を通じて、ホイットマン、ソーロー、の思想に親しむ。またベルクマンの減刑運動を展開していて、オーストリア人エドワー・ドブラッドレイを知る。彼を通じて西欧古典文学になじむ。彼との友愛はこれ以後7年継続、しかしブラッドレイは彼女が運動にひかれるのは母親にならない不満の為と考え、自分の被護の下で妻として暮らすことを求めた。彼女はこれを退け、関係は終った。また先の刑務所生活中に医者のホワイト博士の下で看護婦の役割を果したが、出所後その生活がそれでは立てられないのを知り産婆の資格を取るため一八九五年八月ニューヨークを出発ウィーンへ赴く。

一八九五年　途中英国とスコットランドを遊説中詩人ロセッティの孫達オリーバとヘレン(彼等は Torch 誌を主宰) クロポトキン、マラテスター、ルイーズミッシエル等に出逢う。

一八九五年一〇月　ウィーンの看護学校で若き日のフロイドの講義を聞く。試験を受け、産婆と正規看護婦の資格を取得。

一八九六年　秋ニューヨークへ帰る。彼女はこのドイツ留学時代にワグナーの音楽に親しみ、後年、米国でイブセン、ズーデルマン、ハプットマンの



劇を紹介する下地となった勉強をしたものと思われる。

一八九九年　ハーマンミラー、カールストンの援助を受け医学の研究を続ける。再び欧州へ向い、スイス径由で英国に寄りボア戦争反対の集合を開く。クロポトキンはとどまらせようとするが彼女は集会を強行し成功する。

一九〇〇年一二月　再び米国へ戻る。

一九〇一年九月　マッキンレー大統領、ポーランド系米国人レオン・クゾルゴス Leon Czolgosz に銃撃され死亡。エマはクレーベランドを遊説中だったが、クゾルゴス青年には演説会場で一度逢っている。このため新聞はエマ　ゴールドマンの示唆によるものとした。

一九〇一年九月一〇日　シカゴの友人宅で逮補される。当局は彼女とクゾルゴスを共犯にしょうと努めるがクゾルゴスは否認する。〝わたしは係官に申しあげましたが、大統領の銃撃は自分の義務を果したのです。わたしは自分の指示に従って働きました〟またエマに就いては、〝わたしがクレーベランドのクラブで逢った婦人はエマ・ゴールドマンでした。彼女は投票と政府を信じないと言いました。すべての政府は暴虐だと言うのです。彼女はアナーキーを信じると言いました。わたしはアナーキストです。わたしの理解しているアナーキーは自治(Self-government)です。クレーベランドにいた時がエマ・ゴールドマンを見た唯一の時です〟この事件はゴールドマンの他の家族にまで捜査の手が伸び、民衆の迫害

を受けた。しかし存在しない証拠のある訳はなく、遂に釈放されるに至った。エマはクゾルゴスを〝皆から否定され見捨てられた貧しい不幸な男〟と見ていた。この事件が米国民にとって衝撃であったのは〝米国にナショナリズムが興隆し、その産業的帝国主義的階程を踏み出そうとする矢先の出来事〟であったからだと評家は言っている。

以来彼女は〈赤いエマ〉として米国中の人びとに恐れられる。また〝米国への外国人移民規制法〟によってアナーキストの国外退去の各種立法借置がとられる。これはニューヨークのアナーキー法（一九〇二年の刑法第一四条）に依るものでここでは〈犯罪的アナーキー〉を規定し、それは、暴力または官吏の暗殺または何らかの非合法手段によって組織された政府の転覆を支持する教義であって、その支持者には一〇年の懲役または最高五、〇〇〇ドルの罰金、或はこの両方を併用するものとしている。

この無法な立法借置に対しては米国の自由主義者の間からも非難があがり、エマは弁論の自由連盟(Free Speach League)を結成し、これにP・E・バロー、B・R・タッカー、その他が参加。

一九〇五年　ロシアの俳優ポール・オルレネフ、アラナジモヴア夫人一行と知己になり、エマはマネジャー兼通訳となる。この冬彼女はE・G・スミスと変名して、巡業に加わる。これは成功して、謝礼を受ける。



一九〇六年　彼女は二五〇ドルを資金にして雑誌「大地」Mother Earthを創刊。誌名はホイットマンの詩から借用。彼女は〈女性解放の悲劇〉を掲載する。アレキサンダー・ベルクマン出獄。エマの部屋に落着き、状況の変化と同志の脱落更新に驚き落胆するがやがて回復し一九〇八年から一九一五年に亘って〈大地〉の編集者となる。発行部数三、五〇〇～一〇、〇〇〇部。市民権についてリベラルな人々に対しラジカルに考えるようすすめ、両性の関係についての考え方も検討した。文芸ではトルストイ、ドストエスキー、ゴーリキについての翻訳。ソーロー、ホイットマン、エマーソンの引用、その他作家、詩人の寄稿を受けている。

一九〇七年春　アムステルダムの会議に出席。この会議後、ゼネストやサンジカリストの戦術に注目するようになったが、それでもさようなものは単に準備であって社会革命自体はアナーキズムの導入がなくてはならないとした。彼女が支持したのはイブセン流の個人主義である。そして組織は主に自由に根拠を置くべきであって、その任意で自然な活力のグループ化から人類に有益な結果が生じる。非実体的組合せの組織からは調和のある有機的な生長は望めない。「組織は自覚した知性のある個人によって構成されなければならない」とした。これに対しエンリコ・マラテスターはイブセンの描いたストックマン博士（民衆の敵より）が工場にいたら台座から降りて来たろうと冷やかに答えてた。エマは再びアナーキ

ズムはクロポトキンがイブセンかではなく両方だと言った。「クロポトキンは全体の革命に導く社会状況を示したが、イブセンはすぐれた仕方で、人間の魂の反抗に達する心理的効果—個人の反抗を描写している」と応酬した。そして最重要なのは「現存の制度に対し外的、物理的、内的、心理的反抗の動機を結合することである」と結論した。投票の結果はマラテスターの提案が三八票、エマは三二票で、マラテスター案が採用された。

一九〇八年～一九〇九年　米国当局はエマの市民権につき疑いをもち、彼女の結婚当時に遡って、前夫ヤコブケルソナがその当時市民権を持っていたかどうかの調査に乗出す。しかしヤコブは消息不明、移民法をめぐる当局とエマの闘争は兎角彼女から市民権を剝奪して米国領土に居住させない当局の意図によるものであった。

結局ヤコブはシカゴでヤコブルイスと変名していることが判明したが、彼はエマについては語りたがらず、当局はヤコブも正当な市民権を持っていなかったことを知るに至り、ここに彼女の市民権の剝奪の根拠を得る。エマはこの状態を〈一糸もまとわない自由〉と表現した。彼女は遊説の主題を変え、イブセンの紹介に努める。

一九一〇年　彼女は二五州三七都市を遊説。

この講演旅行の成功はいつも官憲の迫害に遭った。例えば一九〇八年春、ある夕べの講演会では彼女が〈愛国主義について〉という演題で話し終



ると会衆の中から私服になった軍人ウイリアム・ブヴアルダが感激して握手を求めた。これを刑事に探知された彼は帰営後、軍法会議に付され、五年の重労働の刑を宣告された。エマはただちにブヴアルダ救援会を組織し、ルーズベルト大統領に減刑を申し出ている。(愛国心—参照)

一九一五年　産児制限の運動を開始。マーガレット・サンガー夫人を援助する。もともとサンガー夫人は、〈大地〉の寄稿者で、アナーキズムにその精神的開眼を得ている。エマは〈バスコントロール〉〈生まれない子供の権利〉等の演題で遊説。聴衆の反応を次ぎのように述べている。「男性ばかりの時は熱心です。けれど女性達は忍び笑いやくすくす笑いをしてショックを受けたようなふりをして、出席している男達に彼等もつまらぬ行為をしていると意識させます。ですから沢山な女性が出席していると産制を話すのは大変です。」

一九一六年二月　〝医学の問題〟の講演によって逮捕される。この状況をマーガレット・アンダーソンは述べる。「一九一六年にエマ・ゴールドマンは〝女性はいつも口を閉じてお腹を切り開かれる必要はない〟と主張して刑務所へ送られました。」

一九一六年六月二二日　サンフランシスコで準備の日（Preparedness day）のパレード中爆弾が破裂。八名死亡、四〇名負傷する。この事件でトム・ムーニとビリングスが逮捕される。事件の背景は〝大地〟七月号で、

C・R・プランケットが檄を飛ばしたように、〝自衛の暴力だけでなく攻撃の暴力を支持する。当局は銃と兵士と鉄の訓練を受けた軍隊をもっている。われわれはダイナマイトだ。圧迫と暴虐、刑務所、コン棒、銃と海軍に対し只一つの答えはダイナマイトだ！〟に表現されている。この時、エマは西部に遊説中で、この原稿を採用した責任はベルクマンにあった。結果はムーニとビリングスの投獄となる。ただちにエマはムーニとビリングス救援委員会を設置。この事件はベルクマンによってロシヤ民衆に知らされ、クロンシュタット、ペテルスブルグでは救援のデモが起き駐露米国大使、ダビット・フランシスを驚かせる。これによってウイルソン大統領は加州知事を動かせ二人の減刑（二一年の刑）を命じる。評者はこの経過を結論して次ぎのように言っている。「ベルクマンとエマ・ゴールドマンは二五年前（この事件より）間違った理想主義によって、フリックの生命をほとんど奪うところであった。だが今回は良い方向にむかった理想主義によって、ムーニの生命を救助した。結局収支勘定は償われ、記帳はかれら両人に結構なバランスを示したのである。」

一九一七年　米国は第一次欧州大戦に参加。国内の世論は〝戦争は国家の健康である〟国家は戦争と緊密に関係がある。集合的共同体が政治的方法で行動するなら、そして敵のグループに向って政治的に行動するならそれはすべての歴史を通して―戦争を意味する〟かような議論がはばをきか



しウイルソンを介入に踏み切らせた。

これに対しエマは産制のキャンペーンを反戦に転換した。〝わたしは声のつづく限り現在もそして戦争中も戦争に反対を語ります〟エマは自由主義者達がプロシヤの軍国主義に反対しながら次に徴兵に賛成するのはその意味が判らなかった。五月、彼女はベルクマン、フイチゲラルド、レオノールド・アボット等と反徴兵連盟を組織。彼女は女性として動員令に服さなくてもいいのだがアナーキストとして誰でも自己の良心に従うべきであるとするからには個人に対し兵役を拒否するよう忠告しようとは考えなかった。しかし拒否する人びとの側を支持する決意をしたのだと言う。そして連盟はさような人びとの保護を目的としていた。この運動は共感を呼び間もなく一〇万名の反徴兵の署名を得た。

六月一五日エマとベルクマンの逮捕令が発せられる。〝大地〟と〝爆発〟（ベルクマンの発行誌誌名）は捜査を受ける。エマはジェムス・ジョイスの〝若き日の芸術家の肖像〟一冊を持って逮捕される。罪状は〝徴兵登記拒否を人に薦めた科〟により両名はそれぞれ二五、〇〇〇ドルの罰金に処せられる。この科料は全国からの寄金によってほぼまかなわれたが、当局は更に罰金を釣上げ、エマについては市民権剥奪、国外追放の策をめぐらせた。ここに彼等対国家の法廷闘争が始まる。マーガレット・アンダーソンによると〝両人は法廷でも魅力がありました。E・Gは熱烈な

闘争者というより、説教者でしたがベルクマンは激すると裁判官と人間対人間の争いになり、彼の方がエマの抑制した理性的な言葉よりはるかに優れているように見受けられました〟とある。これは米国の法廷では陪審員制度を採用し、陪審員には職業のさまざまな民衆が列席し、刑の確定に大きな影響力があるからだが、しかしこの場合は知識人や組合員、芸術家は排除され、すべてアングロサクソン民族によって構成されていた。注意すべきはエマとベルクマンが、ロシヤ系の少数者であり、陪審員は多数者のアングロサクソン人であったことだ。つまり少数民族の移民には好感をもっていないということである。罪状は四点①反徴兵連盟の寄付金の誤用②ドイツから資金援助を受けている③ハレムリバーカシノの集会で暴力を認めたこと④徴兵登記の忌避であった。これに対しエマの反撃は〝下層部における政治的暴力は上層部の組織された暴力の累積の結果である〟また愛国主義についてはエッセイの中で〝本当の愛国主義者は眼を見開いて米国を愛する者の事である。米国の欠点、社会の欠陥にまで眼をつぶってはならない〟とした。

判事は〝言論の自由は免許証でもなければ、法の不服従を認めるものではない。言論の自由はこの国の男女、市民、それに準じる者の率直、自由、完全、且つ秩序ある表現を意味する…法に従うのはこの政府の下で生活するすべての個人の義務である。個人的意見は充分に表現されてよいが一度法が制定されたならばその法に対する正当な廃止の反論は継続され得ても、法自体には承服しなければならない〟と言うのであった。かような判事の言表は個人と国家が対立するとき、法を仲介とする法官の常トウの言葉である。個人が良心を根拠にするとき国家はその個人の集団から委託された（つまり議決によって承認された）法を盾にして防御する。そこで法自体が一つの代行機関として個人の抑圧に臨む仕掛けになるのだ。



一九一七年八月　〝大地〟誌の発行停止。

一九一七年一〇月　エマの姪ステラ・カミンスキー、M・E・フイッチゲラルド等が〝会報大地〟を発行。一九一八年五月これも発禁になる。

エマは官憲の介入にもめげずロシアの一〇月革命とボルシェヴィキの擁護に働く。

一九一八年一月　エマはミゾリー州立刑務所へ入る。

一九一九年一二月　エマ・ゴールドマン、アレキサンダベルクマン等五一名のアナーキストは国外退去によりロシアへ赴く。

一九二〇年一月　エマは母なる大地ロシアへ到着、一月～七月エマとベルクマンはペトログラードとモスクワでロシア革命の方途につき多くの人びとと話しあう。またロシア各地を回り、左翼社会主義者、マフノの率きいるパルチザン、ユダヤのシオニスト等が迫害されているのを知る。そ

の結果エマは自分が擁護していたボルシェヴィキの実体を眼前にして酷く失望する。またこの時期にレーニンと会見し、レーニンはI・W・Wの実態、米国労働組合の組織、米国での社会主義革命の可能性等を聞き、両人を賞揚した。またアナーキストを監獄に入れたことを否定して、それらはいづれも泥棒やマフノの徒のみだと答えた。両人はレーニンによって提供された地位を政府につらなるものとしていづれも拒否。

一九二一年三月　クロンシュタットでボルシェヴィキに対する反対闘争が起きる。三月七日から一〇日間の苛烈な戦いの後でクロンシュタット陥落する。エマとベルクマンはどうすることも出来ずホテルインターナショナルに苦悩の日々を送る。トロッキーはこの闘争に銃を補給し、一万八〇〇〇名を殺害。

一九二一年一二月　エマとベルクマンはラトビアへ渡る。

一九二二年一月　両人はドイツ入国をチェーカによって阻止され、スエーデンに入国。ベルクマンはニューヨークコール誌へ〝ボルシェヴィキの神話〟を発表。エマはワールド誌と三〇〇ドルで論文を契約。ロシアにおける政治犯の取扱いの現実を書く。これにはコミンニストを非難し資本主義の現体制を有利にするのではないかとのジレンマがあったが、マラテスター、M・ネトロ、R・ロッカーの支持を受けてエマは発表を決意した。〝ロシアにおけるわたしの幻滅〟は資料をベルクマンに負うていると言



われている。

一九二四年一二月　エマは英国へ赴き、レベッカウエストの肝いりでロンドンで会食を行ない、これにはハバロク・エリス、H・Gウエルズ、B・ラッセル等が賛同する。但しエマのボルシェヴィキに対する攻撃には反対意見が出た。B・ラッセルは〝ロシアに代替の政府を建てるのは擁護できない。他のどの党の下でも残虐は存在すると思う。わたしはすべての政府の廃止という事柄がわれわれの人生のうちで、また二〇世紀に到来する機会があるとは思えない。だから政府の攻撃をロシアに望むという運動に参加する積りはない。わたしはボルシェヴィキを多くの点でその対立者と共に悪いと考える……」と書を送っている。エマはこれを非難して、まずラッセルがボルシェヴィキに替る進んだ性質の他の政治グループがないとするのを〝学者の心では思いつかない〟と揶揄(やゆ)し例えそうだとしても現政府の犠牲者達に対し、政治の正義の点からはどのような立場がとれるか。ボルシェヴィキ以外の政治組織が破壊され、運動家達が刑務所や収容所で空しく生を過していてはどの政党が現在のロシアに君臨しているものより優れているか判定するのは困難である。問題は専制と恐怖であって、その背後の特定のグループの名前が何んであろうとこの専制に革命的傾向のある人びとは、誰が誰れによって迫害されるにせよ、絶えず遭遇しなければならぬということだ……と反論した。

ハバロク・エリスは〝ロシアは自分の仕方で事柄を解決すべきだと思う〟と書き送った。即ち〝すべての社会状態はある程度それに先行する社会状態によって影響を受けるものである。だからそれが酷いものだったらその次ぎの社会状態が全く良好である訳には行かない。またすべての社会組織は人間の本質と矛盾の総体としての人間の本質によって形成される。だからこれらの矛盾は社会的計画の実施に投影せざるを得ない。わたしはあなた（エマの事）がどのような社会方式の下でも反抗したいと思うことと考える。しかしそうすることによってあなたは人類に価値ある奉仕をしているのだ〟

実際エマが人類に奉仕しているかどうかは別として右記の言葉からはクロンシュタットの水兵達、政治犯と呼ばれつながれている人びとに対し何らの手をかさない意図が読みとれるだけである。

他の知識人達の挙動はロシア革命政府が労働者の希望であり、卵がかえったばかりの現状で批判は早いとする者、ある程度の犠牲はやむを得ないとする者、アグネス・スメドレは中国滞在の経験から〝コミンニストは農民に希望を与える唯一のもの〟であるとした。結局エマの立場は資本主義の擁護とその手先であるジャーナリズムを助ける利敵行為というのがいわゆる米国の進歩派を自任する人びとの批評であった。

英国での彼女の生活は劇作家ユージン・オニールを紹介し、各地を遊



説。余暇を研究に過していた。その成果は〝前衛的ロシアの劇作家達、その生涯と作品〟に結晶しているという。この本は未刊。

一九二六年秋　カナダへ向け出発。ここではコミンニストの迫害に遭う。活動はロシアにおける政治犯救援のための実情を訴えることであった。

一九二七年　トロント市に在住。地方の労働者炭鉱夫の集会で話す。一九二七年マサチュセッツ州で製靴工サッコと魚小売商バンデッティの疑獄事件が起きる。エマは米国へ入国できない悲憤をベルクマンに書き送る。寄金をサッコ・バンデッティ救援会へ送り、サッコ夫人から夫とバンデイッティが感謝しているとの報に慰さめられる。

一九二八年二月　エマ、フランスへ渡る。著作に専念。

一九二九年ベルクマンは〝コミンニスト・アナーキズムのＡＢＣ〟を出版。彼はエマの原稿整理に力を貸した。

一九三一年　〝わが生涯を生きる〟 Living my life がアルフレッドＡ・クノップ社から出版される。ベストセラーに算えられた。

一九三二年　エマはドイツ諸都市、スカンジナビア諸国を遊説。ナチの台頭に遭う。当時ベルクマンに彼女は書送った。「光景は（ベルリンの）は人類への希望を失わせるものです。大衆に勇気と自尊が欠けていて、彼等は酷い官僚制度に堪え、僅かな失業手当を貰おうと冷たく濡れそぼち列を作っています。それは悲惨な光景です……。わたしは大衆を奮起させよ

うとしましたがすべて無駄でした。人生は全く無駄です」

エマはドイツ産制・性衛生連盟の招待を受けたが、ヒットラが政権を獲得。

一九三三年三月　エマは英国でナチに抗議の運動を展開。一一月オランダへ赴く。ここでナチに対する経済的制裁を労働者にむかって呼びかける。オランダ政府は他国政府の批判を許さずエマと共にナチへの反対者を追放。

一九三四年二月　彼女は文学と劇についてだけ講演が許される条件で九〇日の米国滞在が許可となり帰国、タウンホールクラブでの歓迎会にはレオナードアボット、R・ボードウイン、ジョン・デュイ、その他が出席し彼女を暖かく迎えた。

一九三四年一〇月　コミンニストの粛清が起きる。エマのロシアにおける政治犯の不当な処遇に対する摘発が実証されたことになる。

一九三五年　再びニースの近郊にいるベルクマンの許へ赴く。

一九三六年六月　ベルクマンは同月二七日がエマの六七回目の誕生日で、ボートで回遊を約束していたが前日自殺した。彼は一九二七年頃からエミー・エックスタインと同棲し彼女は五才年下で生活上では彼の負担であった。また彼女はエマとベルクマンの関係を嫉妬してそれが絶えず争の原因になっていた。加うるに生活の破たんによって友人を頼る外なく、病気（前立腺炎）の為の失意によるものである。



一九三六年七月　スペインの労働者達が蜂起。バルセローナに来るようにと招待を受ける。九月バルセローナではCNTとFAIの同志に歓迎される。英国において両組合の新聞と宣伝の仕事を受持つことになる。

一九三九年六月二七日　カナダのトロントで七〇回目の誕生日を迎える。スペインの内戦により生まれたばかりの理想の共同体が崩壊して行くのを見るのは苦痛であった。カナダへはスペインの救援資金獲得のため渡ったもの。

CNTの指導者マリノ・バスクは避難先のパリーから彼女へ挨拶を送った。「あなたはその生涯に亘って、理想の永遠の炎を体現しました。スペインの活動家はあなたを敬愛します。アナーキストとして、全人類の為にあるあなたの偉大な心と変らぬヒューマニズムを尊重し…われわれはあなたを精神的母であると言明します。」

一九四〇年五月一四日　エマ・ゴールドマンは七一才で多彩な生涯を閉じる。死後米国へ入国を許可される。シカゴウオルドハイム墓地に埋葬。

〔主な著書〕Anarchism and Other Essays　1911年
Social Significance of Modern drama　1914年
My disillusionment in Russia　1923年
Living my life　1931年
その他パンフレット多数。

## 編・訳者覚えがき

本書の編集は主として〈わが生涯を生きる〉から、エマの思想の変化に従って選び、エッセイを主軸に、ロシア革命の印象を経てその批評までとした。エマの活動では、一八九〇年代から一九二二年に亘る最も意識的な面を扱ったつもりである。三〇年代のスペイン内戦の印象は彼女の都合で書かれていないが、一般に惜しまれている。

本書の製版を終えた時、群馬・黒色戦線社の大島英三郎さんが、大杉栄の「労働運動―第一次～第四次―」の復刻版を刊行した。ここにエマの著作が幾つか大杉・野枝によって訳出されているのを知った。私見では大杉が反ボルシェヴィキに向け活動を展開した際、ロシアの内情を知る上で、有力な手がかりになったのが、エマとベルクマンの著作だったように思われる。そしてロシア革命の経過を知る上で、エマの見聞記が第一級の資料に位置するのは現代でも変らない。

訳者はひとりのヴァイオリン弾きである。譜に合わせて弾かねばならない。読者が書かれたものを読み、エマの肉声を聞きつけられたら、訳者の労は報われよう。

年譜を編むにあたって“Rebel in Paradis, by Richard Drinnon; The university of chicago press”を参考にした。

一九七三年六月末

## “イデア出版”の意味

われわれは人に従うのではなく，理念（イデア）に従うのだ。―エンリコ・マラテスター―

本の出版は近代社会において，人間精神の自由を明示するものであった。同時に多くの著作家は自著の扉に献辞をかかげ，精神的物質的庇護者をあきらかにしたものである。むしろまた―著述によって，庇護者を求めるとか，社会にデビュする手段にした節もある。

しかし，これまでの人間の変革，社会変革が，本またはパンフレットによって起こされたのは，歴史的事実である。例えばフランス革命を準備したのは，エンサイクロペデイアの人びと，ルソーの著書であり，近くはロシア革命の精神的基盤，革命の伝統を形づくったものに，十九世紀ロシア文学に携った人びとの諸著がある。また五・四運動の文革は，現代中国の革命を達成する推進力になった。

本の形式は，現代のように表現・伝達手段の多様化の中でも理念を取扱うのに適した最後の場だと思う。それは情念（パトス）と論理（ロゴス）を文字に化し，時間と空間を離れた読み手の理解と共感に訴える。〈一冊の本が訴えるのは，せいぜい四千人ぐらいの人だ〉とプルードンは言ったが，彼の理念も今となっては，その著書に拠るしか判らないのだ。

私達はアナーキズムの理念に従う。しかしそれは不動の権威としてあるのではなく，理念を探求し，自己に引受け，支えるものとして従がおうと思うのである。ところで今日では経済上の専有は批難され排撃されるのだが，学問の上での専有はどうだろうか。

※嘗っては，欧米の思想状況に通擁していることが，それだけで権威となる風習があった。そして実にこの事からして，私達を無数の思想が通りすぎ，私達の精神の営みの中で激烈な葛藤を引き起こしたのである。

それ故，私達はアナーキズム思想の本を専有するのではなく各自の自己形成，運動の始点においての問いかけに資するものとしよう。

これを比喩で語れば，フランスはザルツベルグに岩山があり，その山腹の洞窟に小枝をもちこみ，置いておき，数日を経てとりだすと，小枝に純白の塩の結晶体が付着する。私達の精神活動が実にそれである。一切の生の醜悪なものがそのまま変容して―さなぎは蝶になる―新生が始まるのだ。

“イデア”出版の本は読者各位が，それを活用して理念の形成に参加されるよう希望します。


**女性解放の悲劇**　1973年7月20日発行

著　者　エマ・ゴールドマン

編訳者　はしもと・よしはる

発行所　**イデア出版**

東京都新宿区東大久保1－464
松喜ビル　☎（354）1039

製本所　小林製本所

定価　750円　東京都新宿区新宿1丁目18の15